感謝という言葉を超えた「真の我が友」

浅井　充彦さん

浅井君との交流は大学入学と共に始まり、彼の命が尽きると共に終わりをつげ、永遠の記憶として私の中に存在する。

開かれた門はいつか閉じられる。

大学という門をくぐってから、六十五年を胸襟を開いて共に生きた真の同胞である。

ペス創業から五十周年の年に彼の生涯は終わりをつげ、私には喪失感を与えてこの世から消えた。彼の人生には必ずいつも、何処かから至福をもたらす光がさしていた。

何故か知らないが、先祖の恵みとはこのようなものだと傍観者達に見せながら、尚その恵みの中に我々もいつか取り込まれていた。

私の結婚式の司会は彼であった。それより前、彼の結婚式に呼ばれていて、どちらが先に逝くかと話し合っていたが、残念ながらと云うか、先を越された後追いになった。

メンデルスゾーンの「結婚行進曲」をやめて、式のはじまりは「ローエングリーン」の第一幕前奏曲で静謐の中からという私の要求を快く引きうけてくれたが、持ち込んだレコードでこれを実行するのがいかに難儀だったと、後日笑いながら話していた。

株主として会社の経営も終始心配してくれたし、資金不如意の折には融資の助けを差し伸べてくれた。

日本グリーンビルディング協会では事務局長として、理想の実現に向けていつも私の横に立っていた。

あらゆる挑戦も彼の肯定のまなざしで許容され、最高の協力者としてその成果に導いた。

化身として全てを救済した友は、現在も生きて微笑んでいる。